

批評及び紹介

セデス氏「カムボヂャ碑文集」

山 本 達 郎

G. Cœdès ; Inscriptions du Cambodge.
Volume I. Hanoi 1937.

河内佛蘭西極東學院の出版物の中に Collection de textes et documents sur l'Indochine と題する印度支那史料叢書があつて、その第一回には Gaspardone 氏が安南志原を、第二回には同氏が黎朝の藍山碑文集を出版し、最近その第三回として Cœdès 氏のカムボヂャ碑文集第一冊が發表された。同書には別冊の圖版四十枚があつて拓本の寫眞を集めてあるが、此の

別冊は又同時に l'Académie des Inscriptions et Belles-lettres によつて出版されたカムボヂャ碑文集の第六冊を爲してゐる。

カムボヂャの古史が極東學院を中心とする碑文の解讀によつて明かにされてきた事は今更いふまでもないが、近年各地の考古學的調査の結果又多數の碑文が發見されて新史料が甚だ豊富に知られる様になつて來た。一九二三年 Cœdès, Parmentier 兩氏によつて Listes générales des inscriptions et des monuments du Champa et du Cambodge が發表されて以後チャムバの碑文は二十五個、カムボヂャの碑文は三百九個を増してゐるのであつて、主として前者は Cléys, Sallet 兩氏により、後者は Marchal, Trouvé Parmentier 其他の諸氏によつて發見されたも

のである。今回のセデス氏の著書は、此の新発見のカムボヂヤ碑文の重要なものに關する研究であつて、次の如く十四章に分れてゐる。

(1) Kômpôn Chhân州の Phnôm Prâh Vihar の碑文。是には年代が記されてゐなうが、Bhavarman 王に對する讃辭がみえてをり、書體書法からみて、西曆五六一年には在位した Bhavarman II 時代のものと推定される。

(2) Jayavarman I の新碑文。I Kômpôn Câm 州の Tâi Krai の碑文。の中には「Kañeipura の王」といふ文言がみえる。Palaya 朝と印度支那との關係は從來屢々論ぜられた所であるが、碑文にその都 Kañeipura の名前を明記してゐるのは之を以て嚆矢とする。II Prei Vên 州の Thol Prâh Thât の碑文。是は Jayavarman I の時代西曆六七三年——勿論碑文はシヤカ紀元を用ひるが——リングの建てられた事を記したもので、彼の在位年代

は更に之以後にも及ぶとみられるけれども、兎も角此の碑によつて彼が從來知られた六六七年より以後六七三年に在位した事が明かにされた。

(3) Prâh Kô 及び Bakon の建設碑。Siem Reap の東 Rolôh の一群を爲す兩寺の清掃工事の結果、それぞれ一九三二年と一九三五年に發見されたもので、何れも Indravarman 時代の記事を載せてゐる。Prâh Kô の碑は「恐らく彼の子の Yagoraman の時に書かれたものらしいが、此の寺の神像の置かれた年を西曆八七九年と爲し、Bakon の碑はそのリングの建てられた年を西曆八八一年と爲してゐて、共に是等遺蹟の年代を考へる基礎となるものである。

(4) Prâh Kô の西にある (北) Prasat Kandol Dôm 石柱の Ġivasoma の刻文。Ġivasoma は Sâk Kak Thonj 碑文にみえる人物であるが、右の刻文によると彼は Bhagavat Ganakara から教を受けたとい

ふ。この Caikara とは、或は九世紀初頭の有名な印度の Caikaracarya ではあるまいか。

(5) Koh Ker の新碑文。Koh Ker の一群の遺蹟に於ては、十個程の碑文が新に發見されてゐるが、之を従來知られた碑文と合せてその年代を考へてみると、こゝには Jayavarman IV の時代九二一年に

寺としての山 (temple-montagne) を營み創め、その後建設が續いたと思はれるのであつて、之に對する寄進の記事が、特に九二八年と九三二年の間に於て一現れてゐる。Koh Ker は Rajendravarman によつて棄てられたけれども、なほ一〇〇一年にも寺として存續してゐた事實を碑文によつて知る事が出来る。

(6) Pré Rup の建設碑。Ankor Thom の東方に位する Pré Rup に於て一九三四年に極めて長文の建設碑が發見された。之によると Pré Rup は Rajendravarman の時代九六一年に建てられたもの

で、此の王は九四四年に即位してをり都を Yagodharapura に復して後に之を建設した事が知られる。

此の碑文に於ては又 Rajendravarman 以前のカムボヂヤ王の系圖が窺はれるのであつて、系譜の甚だ缺除した部分を補ふ事が出来る。

(7) Bantay Srei の新碑文。こゝに新に發見された四つの碑文中の一つはその創建の碑であつて Bantay Srei が西暦九六七年に建てられた事を述べてゐる。この年は Rajendravarman 王在位の末年に當り、この王の時代の末に着手したものと認められる。

(8) Prasat Kömpbus の碑文。此の遺蹟は一九二九年に發見されて Mlu Prei 州の Khnūn Yan にあり、その碑文は Präh Eñkosei の碑文と略同様であるが、之によると Prasat Kömpbus は Rajendravarman 時代に着手せられて、九七二年に印度出身の婆羅門 Divakarabhatta が之を完成したと云ふ。

(8) Roltoh の一群を爲す Kōk Svāy Prām の碑文。是には九六九年の年次があり Hariharalaya に關する記事がみえてをり、それによつてこの遺蹟は Hariharalaya の中にあつた事實を知る事が出来る。曾て Jayavarman II が居つた所であり、又その後 Jayavarman I が Ahkor の地に Yagodharapura を建設するに至るまで諸王の統治した所の Hariharalaya の都は、かくして Roltoh 一群の遺蹟の地に比定される。

(10) Prāṇ Kō に於ける Jayavitravarman の碑文。從來 Jayavitravarman は Suryavarman I の別名と思はれてゐたが、セデス氏は兩者を別人なりとみて前者は一〇〇二年に Ahkor に即位し一〇一一年より少しく前に後者の爲に退けられたものと考へ、Prāṇ Kō の一〇〇五年といふ年次の記された一碑文を又 Jayavitravarman 時代と見做してゐる。

(11) Mhu Prei 州にある Prāsāt Khmā の二〇

の新碑文。一〇は一〇四一年、他は Udayādityavarman II 時代一〇六〇年と思はれるもので、この王の供物を記してゐる。

(12) Prāsāt Sralau の碑文によると Harsavarman III の即位の年次は 987 g (1065 A. D.) となつて居るが、是は他の碑文に彼の前の Udayādityavarman II が 988 g (1066 A. D.) にまだ在位した事がみえてゐるのと矛盾を來す。矛盾の理由は明かでないが、或は前者が紀元を滿何年と數へ、後者がその年を第何年と數へたのではあるまいか。

(13) Prāsāt Tor の碑文。此の碑は西曆一一八九年(或は一一九五年)に建てられたもので、Jayavarman VII の時代に屬してゐるが、之によつて遺蹟の年代を考へると、西北の聖所は十一世紀の末或は十二世紀の初で大體 Ahkor Vāt の時代に當る事、中央の塔はそれ以前に屬する事其他の事實を知り得るのである。

(14) Takeo 州の Phnom Bayan の新碑文。新舊の碑文を綜合して遺蹟の年代を考察すると、西暦六〇四年に Givapada が丘上に建てられ六二四年にその近くに池が掘られ、六四〇年以前に大塔が建設された事が知られるのであるが、こゝにはその後七・八・九・十世紀の碑文があり、十二世紀の碑文も四個を數へ得るのであつて、此の遺蹟が久しい間尊崇された事が明かにされる。

右の外此の碑文集には終に三つの附録がある。その第一は一九二三年の碑文目録以後の新碑文の目録であり、第二はその碑文と極東學院所藏拓本との番號對照表であり、第三は目録番號と印度支那各博物館の碑文番號との對照表である。

此の碑文集は以上述べた如く特に遺蹟の年代の決定をその主眼とした研究である。カムボヂヤに夥しく残つてゐる遺蹟一般の年代に就いては、甚だ不明な點が多いのであるが、近年 Goloubew 氏等によつて

Ankor Thom の地に Yagovarman I の古都の發見されたのを始として、遺蹟碑文の調査發見が著しく進み、多數の新資料が提供された結果、現在根本的な新研究を行ひ新しい年代觀を建て直す必要が起つてゐる。從來の Stern 氏其他によつて建てられた遺蹟の年代觀、建築様式の相互關係の年代觀は根本的な改變を加へなければならぬのであつて、その基礎を爲すのは何といつても碑文の解讀である。碑文解讀の最高權威者であるセデス氏は、更に今後この碑文集を繼續刊行するといふ事で、これは同氏の名著暹羅碑文集と共に、又それ以上の業績を残すに相違なく、吾人の大いに期待してゐる所である。